

春告草

第14号 令和2年10月7日 進路指導部発行

共通テスト出願始まる！ (連載第3回)

共通テスト出願が9月28日、月曜日から始まった。現役生の出願は在籍校経由で行うので、校内では先週締め切り、志願票の点検・取りまとめを行った。今回は最初の共通テストで、新しい学力像に基づいた入試が行われる。以下に本校6年生の状況をレポートする。5年生は来年度の科目選択決定に向け、進路を絞り込まなければいけない時期になった。先輩方の状況も参考にしながら、慎重に考えていこう。

受験科目登録

地歴2科目・理科2科目は共にほぼ3割

共通テスト出願者は148名(98.6%) 受験期日は1月16・17日に140名、1月30・31日に8名が受験する。

出願にあたっては受験教科・科目の事前登録を行うが、地歴・公民、理科は受験科目数や受験パターンにより、内訳が細かく分かれている。志願票裏面(第Ⅱ面)を右図に示した。6年生の受験教科登録状況は右下のグラフに示した通りである。

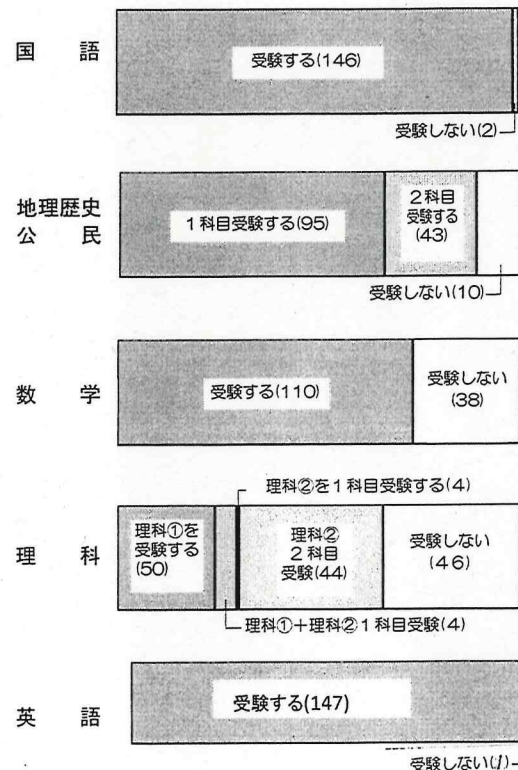
国公立大文系志望者は、地理歴史・公民は2科目受験が基本で、本校では出願者全体の約29%がこのパターンで登録した。ただし、大学・学部によっては、他教科と合わせた中から3科目を課しているケースもある。地歴・公民の1科目登録者は全体の約64%で、これには私大文系志望者、国公立大理系志望者の多数が含まれる。

理科の受験科目指定は複雑で、A：理科①を受験、B：理科②を1科目受験、C：理科①+理科②1科目受験、D：理科②2科目受験 の4パターンから1つを選ぶ。Aは国公立大文系受験の基本パターンで約34%となっていて、地歴・公民2科目受験者数とほぼ一致する。理科①は理科基礎4科目の中から2科目を受験する。文系で理科2科目という科目負担を気にする人もいると思うが、試験時間60分で2科目を解答するので問題量は少なく、内容は基本問題が中心である。

文系志望者にとって理科①は共通テストでの「稼ごころ」と考えて、国公立大受験に挑もう。一方、国公立大理系志望者はDの理科②2科目受験が基本パターンで、約30%を占める。これは昨年に比べ6%のダウンである。Bパターン理科②1科目、Cパターン理科①+理科②1科目

教科名	選択記入欄	
国語	A…受験する X…受験しない	☐
地理歴史 公民	A…1科目受験する B…2科目受験する X…受験しない	☐
数学	A…受験する X…受験しない	☐
理科	A…理科①を受験する B…理科②を1科目受験する C…理科①を受験、理科②を1科目受験する D…理科②を2科目受験する X…受験しない	☐
外国語	A…受験する X…受験しない	☐

受験教科登録状況



はそれぞれ少数派となっている。他教科では、国語を受験しないのは2名だけで理系志望者もほとんどの人は受験する。理系志望者は国公立受験を前提に受験プランを立てるケースが多いためだ。数学は受験しないと登録した人は38名で、私大文系志望者の多数が含まれる。英語受験者はほぼ100%となっている。

大学入試分析 一般入試の合格状況総ざらいと展望 (第1回) 旺文社教育情報センター発表より

国公立大と難関私立大がやや易化、私立大低倍率校が難化！

2020年の一般入試結果を見ると、国公立大は「志願者6%減、合格者：前年並み」、私立大は「志願者2%減、合格者9%増」で、いずれも倍率ダウンした。難関～中堅上位校が敬遠され、中堅の低倍率校が志願者大幅増、難化した模様だ。学部系統別では、国公立大は文理とも倍率ダウン、私立大は「文低理高」となった。

国公立大：後期で倍率ダウンが顕著、ほぼ全学部系統で倍率低下

前年に比べ、国立大が「志願者7%減、合格者：前年並み」で、倍率(志願者÷合格者。以下、特に注記のない場合は同じ)は19年3.7倍→20年3.5倍(以下、年度を略)とダウン。また、公立大(別日程実施の2大学を除く)も「志願者5%減、合格者：前年並み」で、倍率は4.6倍→4.4倍とダウンした。

日程別に見ても、国立・公立のいずれも、前期・後期ともに倍率ダウンしたが、特に後期で顕著だった。後期の場合、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、北海道を中心に8大学で後期の個別試験の実施を取りやめ、センター試験の成績や出願書類等で合否判定を行った結果、入学手続率が読みにくく、合格者を多めに出したことも影響したと見られる。

一方、公立大中期は合格者が10%減と絞り込まれ、倍率がかなりアップした。

大学入学共通テストや主体性の評価など、21年「新入試」への警戒感のため、20年の受験生はもともと現役志向が極端に強く、「超絶安全志向」ともいうべき心理状態だった。さらに、最後のセンター試験の数学I・A、数学II・B、英語(筆記・リスニング)の難化による平均点ダウンが影響し、国公立大への出願をためらわせる要因となった。

難関校では、北海道大が前述の理由から4.0倍→3.6倍にダウンしたのをはじめ、東京工業大(4.8倍→4.4倍)、一橋大(4.1倍→3.8倍)の倍率ダウンが目立つ。また、東北大(3.2倍→3.1倍)、名古屋大(2.6倍→2.5倍)、京都大(2.9倍→2.8倍)、神戸大(3.9倍→3.7倍)、九州大(3.0倍→2.9倍)もややダウンしたが、東京大は3.1倍、大阪大も2.4倍で前年と変わらず、安定した人気を保った。

準難関校では、志願者数トップの千葉大が4.5倍→4.2倍にダウン。「首都大学東京」から名称変更した東京都立大も5.6倍→5.0倍に倍率ダウンした。この他、筑波大(4.1倍→3.8倍)・横浜国立大(4.7倍→4.3倍)・広島大(3.2倍→2.9倍)・大阪市立大(4.1倍→3.8倍)のダウンが目立った。

学部系統別にみると、ほぼ全系統で倍率ダウンした。中でも、経済・経営・商、文・教育・教養、社会・社会福祉、医、歯、教員養成、家政・生活科学のダウンが目立つ。教員養成系は、教員を取り巻く環境の改善が進まず、人気低下に歯止めがかからない。例えば関西地区の教員養成系4大学が、そろって倍率ダウン(京都教育大2.8倍→2.1倍、大阪教育大3.6倍→3.1倍、兵庫教育大5.2倍→4.5倍、奈良教育大5.1倍→4.3倍)したのが象徴的だ。

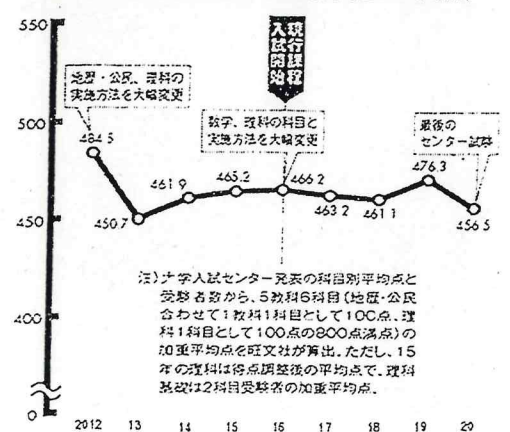
対照的に、理、工は倍率ダウンが小幅に留まった。工では、公立諏訪東京理科大(志願者が約3倍増、倍率も3.7倍→8.5倍に急上昇)のような極端なケースも見られた。

総合点の「合格者平均点」のクリアを最終目標にしよう

「倍率」とともに気になるのが、合格者の最低点や平均点といった「合格者データ」だろう。

合格最低点は合否の分かれ目になる、いわゆる「ボーダーライン」。合格平均点は、総じて最低点より得点率(%)にして5~10p(ポイント)程度高い。合格最低点は「最低目標」として重要なデータなのだが、確実に合格を目指すには、「合格者平均点」のレベルまで学力アップしておくことが望まれる。

グラフ1 センター試験(本試)5教科6科目の総合平均点の推移(文・理系型共通:800点満点)



グラフ2 2020年度/国公立大一般入試 日程別/志願者・合格者動向

